

館山支部だより Vol.104

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川 村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
Tel. 0470-22-0230



梅雨を彩る紫陽花 (アジサイ)
＜5月中旬 拙宅の庭先にて＞

コロナ禍のなか令和3年度を迎えました。

ワクチンの接種も進められておりますが、依然として予断を許さない状況が続き、緊急事態宣言の延長が決定されております(28日夕)。

隊友会においても昨年度は多くの活動の断念(中止・自粛・縮小)を余儀なくされましたが、この状況は今年度も続くと思われるでしょう。

世間では窮状打開のため色々な取り組みが行われております。隊友会も「成り行きに任せる」とともに、少しでも現状から脱皮するための取り組みが必要ではないかと考える次第です。 <支部長>

支部の活動概要

《4・5月活動実績》

4.3(土) 県護国神社春季例大祭清掃奉仕(千葉)
4.16(金) 令和3年度県隊友会通常総会(千葉)
5.15(土) 令和3年度館山支部総会(コミセン)
5..27(木) 旧海軍落下傘部隊戦没者慰霊祭(安房神社)
5.29(土) 5月支部役員会(コミセン)

《6・7月活動予定》

7.21(水) 県隊友会前期支部長等会議(千葉)
7.31(土) 7月支部役員会(コミセン)

令和3年度館山支部総会実施報告

コロナ禍で開催が懸念された今年度の館空会との合同行事でしたが、合同懇親会抜きの総会行事を5月15日(土)コミセンにおいて予定通り開催できたことは幸運でした。

総会では、昨年度亡くなられた4名の会員の御霊に黙祷が捧げられ議事に入りましたが、令和2年度事業報告、会計・監査報告及び令和3年度事業計画等の議案について出席者の承認が得られ、最後は日向支部顧問の締めの挨拶で令和3年度支部総会が滞りなく終了したことを報告いたします。紙面の関係で議事内容等は省略しますが、一点だけ強調させていただくことにします。

館山支部では隔月「館山支部だより」を会員の皆さんに配付しておりますが、これは支部と会員を結ぶ(現状では唯一の)コミュニケーション手段として続けているものです。数年前から県隊友会のホームページにも載せていますが、意図・期待するところは、県隊友会会員に加えて一般の県民・市民に対して、(例えば、「防衛意識の普及や歴史認識の是正、防衛・自衛隊に対する理解・認識の向上、自衛隊に対する協力支援等々」に資する内容等)の情報を発信できることであり、このへんにコロナ禍における活動の停滞を防ぎ、些かなりとも隊友会活動の実績を上げる上で、県隊友会ホームページの活用之余地があると考え、そのための取り組みを進める所存です。 <支部長>

トピックス

第36回危険業務従事者叙勲

崎田 弘会員(海)、杉本 啓会員(海) 瑞宝双光章(防衛功労)受章
晴れのご受章を支部会員一同心から祝福申し上げます。

レクイエム

3/5 山口繁次郎会員(享年85歳) ご逝去
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします <支部会員一同>

総会議決権の行使について

令和3年度隊友会定時総会(6月24日)の各議案(隊友5月号掲載)について、代理人(県隊友会会長)に一任する場合には、議決権の代理行使書(ハガキ)を6月14日までに投函してください。

<支部事務局>

随 想：政府による「同化」の道を辿るモンゴル自治区

以前紹介した中国政府による新疆ウイグル自治区におけるウイグル人の強制収容・虐待について、米国や英国は「ジェノサイド(集団殺戮)」として中国を名指しで厳しく非難しております。下手をすると武力衝突にもなりかねないのですが、政府(大統領)が他国の行為をこれだけあからさまに非難するからには それなりの確証があるからこそだと思えます。

チベット自治区についても同じようなことが言えるのです。中国とチベット間の動乱(1959)では、軍隊を持たないチベットの先頭に立って抵抗したのは僧侶集団だったのです。動乱の結果、チベットを治めていたダライ・ラマ14世はインドに亡命政府を樹立し、領土は「チベット自治区」として中国が一方的に統治することになったのです。しかしチベット民族の独立に対する執念は根強く、その後も集団焼身自殺抗議やデモがエスカレートしたチベット騒乱(2008)など、僧侶や市民らの抗議行動が激化の一途を辿っています。一方で昨年中国で開催されたチベット工作座談会では、「共産党指導による(チベットの)統治が”確認”」されたとか。

盗人猛々しいと言うか何とも空々しいコメントですね。

今回は、ウイグルやチベットの陰であり話題に上らないモンゴル自治区について注目してみることにしましょう。

モンゴル自治区では何が? 弾圧・虐殺の実態

モンゴルといっても日本に大勢の有能な相撲取りを送り続けているモンゴル人民共和国(外モンゴル)のことではなく、中国国内の内モンゴル自治区のことなのです。もともとは人種、言語、宗教も同じモンゴル人ですが、長い歴史を経て中国国境を隔てて内と外に分かれることになった経緯は割愛することにします。

そもそも自治区とは「すべての民族(少数民族)は、自分たちの話し言葉と書き言葉を自由に使い、民族として発展できる」と憲法でうたわれていますが、昨年9月、モンゴル自治区内の小中学校の中国語教育を強化することが指示され、今年の全人代ではモンゴル語から標準語(中国語)への切り替えが決定されております。習近平国家主席の「同化政策」なのです。

またモンゴル自治区への漢民族の移民(集団入植等)が強引に進められ、現在2、500万人のモンゴルの人口の80%が漢民族(中国人)で占められ、特権階級として優遇される一方で原住民のモンゴル人は差別され冷遇されていると言われています。

本題の「モンゴルの弾圧」についてですが、かつての文化大革命の中で、モンゴルの独立を唱える独立派に対する弾圧が次第に激しさを増し、天安門事件では独立派の粛清として34万人のモンゴル人が逮捕され、3万人が虐殺されたと言われています。これらの実態は、日本に亡命中の中国の大学教授らによって、「墓標なき草原、内モンゴルにおける大虐殺の記録」(2010. 2)として暴露されているのです。

特に天安門事件については、共産党政府の恥部としてひた隠しにしているのです。かつて日中共同歴史研究が行われた後、日本のテレビ局が天安門事件の画像を放映した途端にジャミングがかけられ画面が真っ黒になったことがありました。以上のように多数の少数民族で構成された中国のウイグル、チベットそれにモンゴルの三大自治区では、信じ難いような出来事が長い年月にわたって繰り返されてきているのです。内政干渉とかいう話ではなく、人道上の問題として国際的に糾弾されるべきではないでしょうか。

《匿名、中国の近現代史に関心を持つ会員(海)》

再検証 「館山航空基地の鳩小屋・伝書鳩の伝説」

平成27年に新庁舎の完成により旧庁舎が解体されたが、以前、この旧海軍の庁舎屋上に「鳩小屋」があった話を紹介したことがある。旧海軍館山航空隊が、有事の通信手段として伝書鳩を飼育していたのかどうか手を尽くして調べてみたが確証は得られなかった。亡くなった館空会会長の海老原武雄さん(平成29年12月没)が、昭和30年ころ横須賀教育隊を修了し館山基地に着任した際、当時の隊員の間で「鳩小屋」と呼ばれていた庁舎屋上の建屋を居住区として当てがわれ、同僚と2段ベッドを運びこんで住み着いたと言う。生前、海老原さんからこの話を聞いて「鳩小屋・伝書鳩の伝説」が真実味を帯びてきた。伝説に飽き足らずさらに調査したところ、海軍の「軍鳩実験」及び日米開戦時の横須賀鎮守府(現在の横須賀地方総監部に相当)の戦時部署関係の文書(防衛研究所保管)から確証的なものが得られたので紹介する。

海軍の「軍鳩実験」と館山航空隊の位置づけ

海軍では伝書鳩を「軍鳩」と呼んでいた。昭和4年、横須賀鎮守府は軍鳩の実用化を目指し横須賀航空隊に対して軍鳩実験を命じた。実験では、陸上基地間に限らず艦船や航空機からの放鳩、さらには往復鳩、夜間鳩等々、伝書鳩の常識を覆すような試みが行われている。作戦行動中の艦艇や航空機からの運用を考えていたようである。実験は昭和10年まで6年間続けられそれなりの成果を収めたようであるが、以降の軍鳩の管理は横須賀防備隊に委ねられることになった。この実験に際して、以降の作戦運用を考慮して軍鳩を管理するいくつかの「飼育庁(部隊等)」が指定されたが、昭和5年に当時の須賀鎮守府唯一の実戦航空隊(横須賀は実験航空隊、霞ヶ浦は教育航空隊)として華々しくデビューした館山航空隊がこの飼育庁の指定から除外されることは到底あり得ない。このことは館山航空基地が飼育庁として軍鳩の管理(飼育、訓練、運用等)を行っていたことの証左と言ってよいであろう。

日米開戦と同時に構築された軍鳩通信網

横須賀鎮守府は開戦と同時に戦時体制部署を発動し、横須賀防備隊に対して鎮守府司令部に軍鳩50羽の配備を命じた。非常時の鎮守府司令部と隷下部隊を結ぶ「軍鳩通信網」の構築を意図したものである。同時に軍鳩要員(飼育、訓練、運用等)養成のため軍鳩講習を企画し、隷下部隊に対して講習員の選考・派出を命じている。

館山航空隊が軍鳩通信網から外されることはあり得ないであろうし、開戦と同時に下命された警備体制の強化に伴い館山基地は横須賀防備隊洲崎防備衛所(水中聴音測定所)の警備を割り当てられている。必然的に非常時の館山航空隊と横須賀警備隊間の直通通信網のひとつとして「軍鳩通信網」が構築されたであろうことは十分に考えられる。

館山基地で伝書鳩が飼育されていたという記録文書の根拠は見当たらなかったが、以上のような状況証拠(確証と見るべき)から、「鳩小屋・伝書鳩」は伝説ではなく、史実と断定してもよいであろう。

《自称地域史探索マニア その29》